

第4章 大学生自身による“大学における学び”の探求過程 - 学び支援プロジェクト(学び探求編)での学生たちの模索 -

水 間 玲 子

(奈良女子大学文学部)

はじめに

近年、大学教育改革が進んでいる。その中で、心ある大学教官は、いかにして大学の授業を面白くするのかという問題を掲げ、授業改革に取り組んでいる。それでも、学生の声に耳を傾けると、依然として、「大教室であさっての方向を向いたまま講義する(京都大学文学部1回生)」、「教授の声が小さく字も汚く何を言っているのかが分からない(京都大学工学部1回生女子)」、「先生が1人で勝手に説明しているだけ(京都大学経済学部1回生)」、「教授の目が生徒を見ない(京都大学(京都大学法学部1回生)」などといった授業が存在しているという指摘、そして、「何も得るものがない(京都大学教育学部1回生)」、「ある程度のラインを超えると教える・学ぶということが不可能(京都大学法学部1回生)」、「高校の授業の方が興味を引く話をしてくれた(京都大学教育学部1回生)」、「自分の人生の大切な時間を費やそうとは思わない(京都大学総合人間学部4回生)」という学生達の不満にたやすくたどりつく。

しかしながら、そのような動きがすすむ一方で、大学改革ということを考えた場合、実は教官側のみに焦点をあてるだけでは不十分なのではないかという指摘が提出されてきている。溝上(2003)は、たとえば学生が授業に興味を示さないのは、実は教官側の努力ではどうにもならないところがあることを指摘する。たとえば、授業をなぜつまらないと思うのか、なぜ魅力を感じることができないのか。このことを学生達に尋ねてみると、教官側の授業能力の低さや授業展開の悪さもさることながら、「内容に興味がなかったから(京都大学教育学部1回生)」、「自分の興味のない分野だから(京都大学法学部1回生)」、「時間割の都合にとったものの、全く興味がもてない(京都大学工学部1回生)」といった、“自分の興味との不一致”をあげる学生は決して少なくない。また、「一般教養としてとりたかっただけに、専門的すぎ(京都大学工学部1回生)」、「習っていない事を知って当然のように用いる上に、スピ・ドが早く内容が非常に高度(京都大学農学部1回生)」、「一般教養でも何でもなし、その道の最も難解な内容を教えられる(京都大学教育学部1回生)」など、興味の方向性は合っている、内容が難しすぎるということに不満を感じている学生もいる。同時に、「先生が単に教科書の中身をリピーティングしているようだ。本を読めばいいような感じがしてならない(京都大学法学部1回生)」、「教科書の書いてあることの繰り返し。そのような授業にするのならわざわざ授業と専用のレポートを配る必要がない(京都大学総合人間学部1回生)」など、逆に、内容が簡単すぎる、あるいは単純すぎることに不平をもらす学生もいる。ひいては、「人間的に嫌い(京都大学教育学部1回生)」、「親しみがわからない(京都大学文学部1回生)」など、もはや授業以前の問題を主張してくる学生さえいる。加えて、水間(2003)では、学生には、大学の授業とは全く関係のない大学生の各自の生活の流れがあり、授業とはまったく関係のないところで学生は授業への意欲を失うことがあることも報告されている。

そのような事柄を考慮し、大学における授業の問題を考える際には、それを受講する学生側に焦点を当てた研究がなされるべきであるという主張は早いうちから見られていた(たとえば溝上, 1996)。そして学生参加型授業の実践報告(溝上・田口, 1999)や授業への参加動機の検討(水間, 2003)、ひいては、学生を主体としたFD実践(橋本, 2003)など、学生のあり方を中心に据えた研究報告は増加の傾向にある。

本論文では、その視点を一歩推し進め、学生自身、“自分自身が大学で学ぶ”ことをどうとらえているのかについて考えることを目的とする。大学における学びの問題の当事者は、言うまでもなく学生達である。大学改革に携わる教官にとってよりも、限られた時間をそこで過ごす学生にとっての方が、より切実なものである。その問題を、大学での学びを放棄するという形で解決する学生もいるであろうが、学生達が本気で“大学における学び”に向き合ったとき、学生達はいかにそれに向き合い、どう探求していくのであろうか。ここでは、授業”学び支援プロジェクト-学び探求編-”において、自らのテーマとして“大学における学び”を明確な形で打ち出していった学生

4名に焦点をあて、彼らの意識の変遷をたどりながら、「大学における学び」とは何かを考えていくことを目的とする。

第1節 検討方法

(1) とりあげる学生

とりあげる学生は、授業「学び支援プロジェクト-学び探求編-」において、自らのテーマとして「学び」の問題を明確に打ち出した学生（尾崎，2003参照）のうち4名である。全員男子学生であり、1回生1名、2回生2名、4回生1名であった。

(2) 検討される資料

本論文で扱う資料は、以下の通りである。1．初回アンケート，2．授業終了時のリフレクション・シート，3．最終レポート，4．授業終了後インタビュー，である。2．を中心に、その他の資料も適宜織りまぜながら、各学生の思考の変遷と問題意識の移り変わりをたどっていくこととする。

第2節 事例

(1) Mの事例（京都大学薬学部2回生）

この学生は、一貫して「学び」しかも「大学における学び」というところからテーマを逸らさずに議論を重ねた。初回のアンケートにおいて、「大学における学びの探求」というテーマにひかれた理由を、「大学とは何を学ぶところなのかということにとっても興味があった為。また、学ぶということを各自がどう考えているかだけでなく、大学という高等教育機関が学びの場としてどのようにあるべきなのかについても考える機会がほしかった為」であるとし、授業では、「学ぶということを考え、今の制度との矛盾は何かを知り、今後、大学という場でどのように学びがなされることが望ましいのかについて考えてみたい。」と述べていた。これらの問題意識は、本論文の目的にも類似するものであり、授業者側が授業のコンセプトとして持っていた問題意識を、彼自身がすでにもっていたといえる。そして、視点が外へ内へと推移しながら、「学生のあり方」を問う結論に至っていく。授業の最後に、彼は自らのテーマの変遷を以下のように振り返る。

「大学における学びの探求」の討論において、はじめ、私はテーマとして大学の制度というものを中心にすえて考えをすすめた。主に、制度が如何に大学生を教育し、伸ばし、将来を選択する上での助けとなっており、また、逆に妨げになっているのかということに対して最も興味をもって討論をおこなった。そのような討論を通じてできた考えが、大学とは受け取る教育から、自ら探求する「学び」への転換の場であるというものである。そして同時に、そのような考え方をし始めたことから、大学の側ではなく、学生側の実際というものに興味に移った。そして、大学の制度やあり方ではなく、それぞれの学生が如何に行動するかということや、大学とは何をすることかについて考えることが大切であるということに気がついたのである。

4月16日の第一回目の授業においては、学外での活動に生き生きとコミットし、充実した大学生活を送る学生の座談会の内容が授業全体で議論された。そこにおいて彼は、そのような学生のあり方について、「大学外で活動をしていることそのものが素晴らしいものであるなと思ったし、座談会のメンバーも生き活きとしていて、充実した生活を送っているのだなと感心した」としながらも、「しかしこの会のメンバーは、「大学」をそもそもつまらないものであるだとか、将来に向けて自分はどのような専門能力を身につけていくのかという視点が欠落していると感じた」、「将来の社会を担う者としての基礎を欠いたまま活動にのめりこみ、そのまま社会へ出ていく事は『逃げ』や『楽しみ』を中心に行動しただけではないのか」という厳しい視点も投げかけている。同時に、「大学のシステム自体も、『学内』人間と『学外』人間とに分かれてしまう根本要因をしっかりとらえ、研究・教育そして社会人・特にプロとをつくる高等教育機関として、そのあり方を問われるべきで

はないか」と、大学のあり方にも疑問を呈していた。この、学生のあり方に対する疑問と大学のあり方に対する疑問は、彼の本授業での探求テーマの2大支柱ともいえるものであり、それぞれが前景となり背景となり、コンスタントに彼の問題意識を占める。

どちらかという、前半は、大学に対する疑問、直接的な言い方をすれば、大学制度に対する不満が前面にあり、ただし、それと表裏一体の形で、自分自身のあり方や考え方に対する疑問や反省が見え隠れしていた時期であったといえよう。特に、4月23日、鎌田先生との座談会を終えての感想には、「目的をもっている学生にとっての一般教養とは何か、更に進めて言えば、一般教養や個人でやりたいものだけを受ければよいという点において、一般教養を講座として開いている意味とは何か。」「一般に、いかに学ぶべきかを考えるに当たって、大学というもののあり方は問われてしかるべきものであると私自身は考える」とあるように、大学のあり方、現在自分が縛られている制度に対する不満が強く打ち出されている。

ところが、学生である限り、大学に不満を抱きながらもそこに属さねばならないという矛盾を誰しも経験する。その矛盾から来る不全感を解消するために、ある者は大学の制度とは関わりの浅いところで充実感を得ようとする。彼の場合、その不全感に真っ向から取り組んでいた。4月30日のリフレクション・シートにおいて、「先週の鎌田先生のお話以来、自分の中で『学び』とは何か、『学び』のきっかけとは何かについて考えてきた」と書いており、また、4月30日の上回生のお話を聞いた後で、「吉村さんのお話なんかだと、いかに学問を学んでいくかという、そういうお話も出てきて、そのあたりから、やっぱりここで本当に学びの探求というテーマに沿っていくものなのかな」と感じたというインタビューで答えている。また、この4月30日のリフレクション・シートには、以下のような記述が見られるが、これは彼のその後の変遷をたどる上で示唆的である。

大学というところは、教育の転換点であると強く考えた。(略)吉村さんの話は、(略)大学を“利用した”ということが強く前面に押し出されており、個人で進む方向が決まっていれば大学は利用しやすい宝箱のようなものであるとの考え方を感じた。吉村さんの話では、教育の転換の場としての大学、passiveな学びからactiveな学びへ転換するところが大学であるということを強く意識させられた。

自分で学ぶ事を見つけられた場合には、京都大学は非常に利用しやすいところであると思うが、では、見つけられなかった人に指針を大学が与える事はできないものかと考える。

前者の、「passiveな学びからactiveな学びへと転換する」ということは、彼が最終的に結論として帰結していくところであり、後者の「では、(学ぶ事を)見つけられなかった人は」という点は、その後、彼が自分自身に対して問う疑問の核となるところである。

5月7日のディスカッションはあまりうまく出来なかったとの事であるが、この回を通じて「話を聞いたときに、あまりそういうふうに関心を持って自分の生活を振り返ってなかった」ということに気づき、「疑問はあるし文句は言うんですが、だから何なんだというレベルでしかものを考えていなかったのも、そういう意味では、初めのディスカッションの時点からもう、普段の生活の中に考えるものがあるなという、身近なところにテーマを絞ろうという決意ができた」とインタビューで述べている。

それを受けて、5月14日のディスカッションでは、大学制度について日頃思っている不満が議論の主題としてあげられている。その日のリフレクション・シートにおけるディスカッション内容の報告は以下のようなものであった。

(時間がない、時間配分がうまくいかないというH君のプレゼンを受けて)時間配分と課外活動や大学とのバランスを如何にとるべきかというのは、私がかねてから悩んでいたのも共感できる話でできた。特に、制度の問題とからんで、「出席」とをとるということが非常に大切な青年の時間をおさえているという認識を持っていただかないとただの嫌がらせである。(略)私自身のプレゼンは制度中心で「教養とは何か」という問いを中心に置いて学びを考えたいということだったが、議論においては総じて「単位」という制度があるからその為という面は非常に強い。「学ぶ」姿勢というものは、

個人のモチベーションに依らざるを得ないが、意欲ある学生にとって目を積むようなあり方の教養課目、専門課目に対しては大きな疑問をもった。(略)(「勉強とは何か」というE君のプレゼンを受けて)確固たる「もの」を見つけなければ「学び」はなく、その「もの」を見つけること自体が大学における大きな「学びの課題」であるとの認識に至った。

この回のディスカッションの相手2名は、共に大学における、あるいは大学の枠を越えたところでの広い意味での勉強ということに悩んでおり、学生Mにとっても問題意識を共有できるよい機会であったと思われる。実際、彼らの姿が鏡となって、自分自身の問題点を見据える事ができたようであり、その意味で、この日、問題を共有できる学生とディスカッションをすることができたということは、彼の問題探求の上で大きな意味を持ったと思われる。この点については、M自身、インタビューで次のように述べていた。

EさんやH君というのも、勉強をどうするかということをしごく悩んでる、私自身は勉強をどうするかという考えはあまりなかったものですから、勉強というものをしごく大事に捉える一方で、先を見るということはどういうふうにしていくべきなのかという疑問も結構……。勉強勉強っていうんですが、誰も先が見えてないんですよ、ディスカッションしてみても。私自身もあまり見えてなくて。まあそういうところから、興味が、今の状態というよりも将来を見ないといけないかなという、そういう部分ではしごく影響受けたかなと。基本的にはその辺で、大分どういう考えにしようかは固まっていたんで。

既にも書いたように、もともとMは大学への不満をもらしながらも常に自分自身を糾弾するという姿勢をもっていたのであるが、ここで分かるように、ある程度この回で、彼なりの問題意識の所在は明確になってきている。将来という時間軸を据えた上で、自分自身がいかに現在の勉強を進めるのかということである。その視点から、大学を捉え直すという過程が以後進んでいく。

次の5月21日のディスカッションにおいて、「大学はプロセス」「専門という感覚はなく、教養をつけるために大学に来ている」と言い切る学生Uのプレゼンを受けて、逆に彼はそこまで大学のあり方を否定しているわけではない自分自身に気づく。

大学はプロセスであるという考えには、違和感を覚える部分もあった。将来へ向けてのプロセスである面は否定できないが、「学び」はプロセスこそ重要であると思う。

これは、彼の大学とのかかわりを象徴的に示していよう。自分自身が勉強すればよい、しかしながら、彼は、大学のもつ魅力や人的ストックの豊富さに気づいており、また、自分が大学生である以上、そのしがらみから完全に解き放たれるわけではないことも知っている。だからこそ、彼は、大学における学びを真剣に考えるのであろう。「自分で方向は選ぶべき」と発表したG君のプレゼンテーションを受けて、彼は「私はやはり、大学へ来ている以上、「制度」をさけては通れないものであると思う」という感想を得ている。だが同時に、自分の考えをまとめる過程で、「『学び』はどこへ行く為のものか、いつまで続けるものかについては、『学び』自体が大切との認識」を得たことも報告されている。そして、この回のディスカッションでは、以下のような気づきを得たと報告している。

学びのプロセスが大切で具体的に将来の為の準備として割り切ることができるとは限らないということ。

「大学における」という「学び」は、将来の「学び」の模索のことではないだろうか。

この気づきは「『制度』」にかなりこだわってきたが、『制度』だけでなく、『自己実現の為の意思』、『自己管理』など、自分がどう動くのかとあわせて考える事が必要との認識に至った」という点で意味があると述べており、ここにおいて、彼の問題意識が完全に自分自身の文脈に還元されているプロセスを確認する事が出来る。大学でどう学ぶかという問題が、彼の自己実現や人生という大きなバックグラウンドの中に位置づくものとな

ったのである。

そして、次の回に向けて「自分が生涯かけて学ぶテーマを見つけるためには、大学ではどのように行動し思索すべきであるのか」という問いを立てている。彼は、学ぶ意欲も十分にあるし、問題意識も非常に強いのであるが、実は「何を学びたいのか」という点については明確な答えをもっていない。この学生の特徴として、常に大学に対する問題を見据えながらも、自己の問題に還元しているという点をあげることができるのだが、それは、彼自身が常にこの点を自分の問題として掲げていたからではないだろうか。これについては、インタビューにおいて次のように説明している。

基本的に性格だと思うんですが、非常に僕は自己嫌悪が強いんですね。どうも自分が好きじゃない。昔から何をやってもうまくいかないう人間だと思ってるんで。大学に来て文句は言いますし、確かに授業はつまらないと思いますし、でも成績が悪いとかそういうわけでもなく、ただ、将来が見えていない。正確に決まっていなくて、自分自身、そんなに何か自信をもって将来こういくという目標も定まってないのに、人のあらってというのはすごくよく見えるんですね。こいつはここが考えられていないとか、この人はこの部分で甘えてるんだろうとか。そういう目をあまり自分に向ける機会がそれまでは、結構忙しかったり、そういう時間をあえてとるということを普通人ってしないと思うんですね。そういう意味で、この授業は、溝上先生もキーフレーズでよく使っておられましたけど、自分にどう戻していくか、おろしていくか、という言い方を、心理学から言えばそういう言い方がしっくりくるのかもしれないですが、僕は、自分に還元する、そういうテーマの授業だと捉えて出席していましたので、常に、自由とは何かってIさんがおっしゃったら、僕にとって自由は何だろうとか、そういうことを考える時間として利用できたので、考える時間っていうものをとるという機会を与えられたので、自然にそういう方向に流れたかな、と。それでまあ、普段する機会もないですし、人のことを書くより、自分のことのほうが考えやすいでしょ、ということで、こっちにシフトしたかなという部分があるんです。

そして、もう一度ディスカッションを経て中間期作業へと入っていくのであるが、彼が中間期作業で実際に行ったのは、教官へのインタビュー調査であった。彼自身の思考が最も進んだのは中間期作業であったという。発表会のレジュメにおいて、彼は以下のように報告した。

中間作業を通じて、これまでの討論の中で考えてきた大学のとらえかたが大きく変わった。「勉強は自分でしていた」(溝上先生)という話は、平竹先生も同様のことを仰ったが、大学が何かをしてくれるという考え方に疑問を抱ききかけとなった。四月から中間期まで、教育を行う機関という側面を強く捉えた上で学部生に対して大学は何をしてくれるか、という見方をしていたが、インタビューを通じ、そして、「大学は大人の行くところ」(高野講師)という話から、大学とは研究の場であり、自ら大学の一員として探求しなければいけないという考えを持つようになった。(略)

中間作業を通じて、①大学は研究(探求)の場であって、高校までの教育の延長ではないということ、②自ら動いて探求するということができない学生と、積極的にやる気をもって動く学生とは分けて考える必要があるということ、③大学が特に②の前者の学生を多く抱えた「制度」になっている以上、選択と無視が必要であるということ、そして、③学部生の間に大学でできることは、積極的に「探求(何を学ぶか、または何を学ぶかを決めるためのきっかけや出会いを含めて)」することが大切であり、その面から捉えれば大学とは人的ストックや「学び」の課題のある出会いの場として捕らえることができ、積極的に活用することが望ましいということなどを考えるにいたった。(略)

このような、「大学」の位置づけと、私たち「学部生」にかけていることは何かという二つのことを考えたうえでの結論として、「大学の一員としていかに過ごすか」については、将来を常に意識しつつ、気概を持ち、好奇心を失わずに毎日を過ごすことが大切であると考えているにいたった。そして、その際に忘れてはならないのは、「大学」はただ漠然とくるところではなく、「大人の来るところである」ということである。

これが彼なりの大学の位置づけであり、そこに身を置く学生のあり方に関する結論である。彼自身は、大学を一度辞めた後に京大に入り直しており、大学への理想は高く、「大学というものを真摯にとらえています」とインタビューで述べている。学生たるもの、どうあるべきか、という事へと焦点がうつった背景には、制度

の問題を論じて仕方がないという経験上の知恵と、自分自身のもつ大学に対する捨て切れぬ愛情があるように思う。彼の問題意識は先に示した概要にあるような変遷をたどるのであるが、その過程について、インタビューで次のように説明している。

一番初めは、大学の制度とといいますか、講義に対する不満とといいますか、専門科目が面白くもなんともない、それでいて変な拘束がいっぱいありまして、まあ、大学に対する不満がいっぱいあったものですから、大学がどうあるべきかっていうのを考えようと思ったんですね。それを考えているうちに、じゃあどうやって解決するんだって考えた時に、大学生っていっぱいいるんですよね。結構話していると、僕自身は勉強というか、いわゆる学びたいと思って大学に来てるものですから、勉強なんてどうでもいいやみたいな、そういう学生があまりに多いという現実も目の当たりにしまして、結局、学生が多様化しているのに、大学がどうこういってるのは・・・まあ、何らかの形で答えは出さないといけませんが、大学の制度云々というのは、僕が考えることではないな、とどっかで思い始めて。それを考え始めた時に、やっぱり悪いのは大学生のほうにも多くあるんじゃないか、つまり、大学側が悪いというのではなくて、学生が大学というものをどうとらえているか、というところから、何か大学に理想をもってきた人は理想とのギャップでしょうし、大学というものの制度を考えたり、どうしようというのは、やっぱり、多くの学生を何とかしたいという義憤や正義感のようなものがあるでしょうし。そんなことを考えだしたら、大学云々ってということよりも、学生側を見るほうが面白いんじゃないかと。そういうふうに思ったときに、今の学生の問題点、勉強しない、意欲がない、そういう学生が非常に多いということで、学生側を考えてみようと思ひまして。そうしたときに、あまりの惨状に気づきまして、それは大学生じゃないだろう、高校の延長で入ってきちゃってるという感覚の人が非常に多くて・・・。(このことは)ディスカッションなんかでそう感じる部分が多いんですが。僕に言わせればそれは甘えだよっていうのがものすごくあらゆるところで出てきて、普通の大学生活でそれと思ってましたんで、僕の薬学部周りが浪人生ばかりなんですね。ほとんど現役生がいない。仲のいい連中で現役生は、Kだけなんですね。私も前の大学辞めてますんで、結構、大学というものを真摯に捉えています。というか、レールの上ののって大学まで来ちゃったという感じの人は結構少ないですね。そういう中でやっぱり高校生みたいな気分のままで来てる人が非常に多いということに気づきまして、そう考えた時に、自分の中にも結構それが残っているなど。社会的な責任云々ではなくて、道義的なものでもないんですが、学ぶということに対して、自覚のようなものがあるに欠けていて、講義を行っている教官の方は当然、もちろん実績もありますし、偉いとは思いますが、本当に学ぶ意欲があったら、文句じゃなくて、実際にもっと自分が学んで、先生に提言なり、学ぼうという気概があるものとしてものが言えるんじゃないかというような自分に対する反省というものがものすごく出てきて、自分の半端さに気づいたんで、自分を中心に、学部生のうちに大学とは何をすべきところで、どういう心構えが必要なのかっていうことを考えてみようかなと。それにあたってはやはり、大学というところにずっと続ける人以外は、将来を見据えないといけないうことですから、将来を決める場所として大学をどう捉えるか、そういうことも考えたいな、と。そういうことでこういうテーマになんともなくなってきたという感じですね。

彼の場合は、それは第三者的な立場にとどまらず、自分の中の甘さにも厳しい目が向けるわけであるが、その後の提出レポートに、彼の姿勢がうかがえる。

中間期でインタビューを行う中で、私は、「学部生として、大学の一員であるとか、学問を探究するという自覚が欠けていたのでは無いか」という疑問を持つようになった。それは、インタビューで伺った話ではいずれも自分で学んでいたということの前提として、積極的にやる気をもって、学問に向かっていったという事実があったのに対して、これまでの討論を通じて、私をはじめ多くの学部生は「お客様」のように教育を受け、大学が何かをしてくれることを過大に期待している、もしくは、大学の利用の仕方、さらにはそもそもの大学のあり方というものを勘違いしているのではないかとと思われるようになったからである。「お客様」までとは言わないまでも、少なくとも自ら行動し、着実になすべきことをなしているという学生は非常に希であると思われた。「一般教養がつまらない」だとか、「専門が役に立たない」というのはあくまでも大学が提供してくれるもので学ぼうという受動的姿勢であって、学問を探究しようとするものの態度では無いと考えるようになった。また、これまでは大学の制度などを考えようとしてきたが、大学とはどのような場所であるかとい

うことや、自覚の持ち方や大学のとらえ方といったような学部生の側の問題について、先ず考える必要があると考えた。そして、そのための準備として、大学とは本来何で有るのかについて、自分なりにとらえなおさなくてはいけないとも考えた。

(2) Hの事例（京都大学工学部2回生）

Hは、大学に対して不満をもっていた一人であった。ただし、他の者と違うのは、大学への不満は副次的なもので、自分自身に対する不満が大きく自覚されていたという点であった。それは、当初の受講希望レポートにもうかがえる。

「自分を高める」そう意味で受けた授業を受けてきたし、まあまあいい成績もとってきた。しかし、正直に言えば、「これだ！」という覇気（表現しにくいんだけど）がない。何となく受けているという間も否めない。

授業終了後のインタビューで、彼は当時の状態について、以下のように説明してくれた。

無力感でもないんだけど、なんだろうなあ。なんせ人の中に属していない孤独感がまずあったんだろうし、工学部の中でもなんかちょっと、周りでがんばろうっていう人がいなかったっていうのもあるし。サークル入ってないっていうもあるけどなんか人よりちょっと遅れてるっていうか。遅れてる_なんかプレッシャーじゃないけど、気後れ...なんか劣等...劣等じゃないですけど、なんかがんばって楽しんでる人をみてうらやましがってた。

彼は、大学の授業にはまじめに出ていたし、大学における授業にも「成績のために」ほぼ出席してきたという。だが、そのような態度は、実は、大学受験までに培われてきた「勉強」をする態度の延長上にあるものであり、「学問」としての学びではなかった。かといって、熱中できるサークルやクラブがあるわけでもない。このことは、彼が自らの大学生活を意味づける上で、かなり否定的な影を落としていたようであった。授業期間中にはその話題はほとんど出てこないのであるが、授業終了後のインタビューでは、サークルの問題は当時の彼にとって中核的な問題であったことが語られた。彼の当初抱いていた不安全感は、サークルに入っていないということも引き金になっていたのであった。

なんか、時間無くなって。時間を、まあ、やっぱり自分の中ではサークルっていうのが実は重かった。あんまり当時としては言いたくなかったんですけど_属してなかったっていう。（それでちょっと焦燥感みたいなものが）ありましたね。でも2回生だし、もう5月になってきたし、っていう。

人に、大学時代遊べよって言われるんですよ、それがちょっとくやしい。そういうのを全く気にしないで、遊びだけに専念して、それをやりとげるっていうのならそれでもいいんですけど、僕ちょっとそういう性格でもなかったんで。一番最悪なのは、サークルも入らないで、勉強もしないっていうのが最悪。遊びも勉強もしないのが最悪。それが去年だったんで。で、今年は、じゃあ、サークルやらないで勉強一筋にかけてみようって。かけられるか？って。先の話になると、そこら辺から勉強できるかって。

しかしながら、彼はこの問題にはあえて触れずに問題を設定し、状況を打破しようと試みていた。言うなれば、彼は、他者に言いたくないサークル所属をめぐる問題について直接取り上げることはせずに、他者と共有できる時間配分の問題に終始する形で自分自身の問題に向き合っていたのである。

さて、初回のディスカッションの後、彼は「議論はできなかったが、日頃自分が人に言わないようなこと（コンプレックスを感じている部分）について話せることができてよかった。これから正直に自分のことを述べるができるかな、と期待がもてた。」と述べており、「自分が考えているつもりになっていても、案外その考えが具体化されていない」ことに気づいたと書いている。4月30日の振り返りにおいて、「世界を広げないといけなく感じるが、大学の授業をまじめにうけていたら、時間が足りない気もする」と書いていたが、

ここで彼が議論の話題としたのは、現状の時間のなさであった。この回のディスカッションではさほど大きな展開は見られなかったようであるが、今後の期待を抱かせた点、彼に話すことを動機づけている点で、初回のディスカッションとしては意味のあるものであったといえる。

そして、5月14日、第2回目のディスカッションでは、議論を通して「周りは皆、サークルは面白いと言うが、楽な方に流れているだけではないか。確かに学べる面はあるにしても、将来に向けて勉強する（本を読むなどの）方が重要ではないかと感じた」と書いており、彼の琴線にふれるものであったことがうかがえる。ただし、ここで書いている内容については、「自分にとっての言い訳」であるとインタビューでコメントしていた。しかしながら、そのような防衛はあるものの、この回のディスカッションは彼にとって重要なものであったと考えられる。彼は相手に対するコメントに次のような言葉を書いていた。

プライドがモチベーションになっているという点はとても実感をもちました。僕自身授業に対してそういうところもあるし、大学受験にもそういう所があったと思います。そういう自分に不安があるのも事実です。

これは、先の「これだ!」といえるものがないままに勉強をしているということと密接に関わっている。そのような態度は、彼自身、自分自身の意志ではないのではないか、と疑念を抱くところでもあったようである。自らが活動を行っているのに、それに対する意味が明確に見えてこない。人は、その時の自己の状態によって世界を体系化していくから（cf. やまだ, 2000）、そのような自分に気づいた際に、それはプライドを守ろうとしているためではないのか、とかいう類の、自己の主体性を疑う否定的な意味づけへと洞察が展開されたとしても不思議ではない。しかしながら、同じ回において、「勉強する意義をどうするかとか、時間の配分をどうするかということは、他の人も考えていた」ことに気づき、「自分が必ずしも独特な考えをしているという訳ではなかった。（自分が踏み込もうか迷っていることに対して）やっていけるかもと感ずることができた。」と述べている。今の自分の状態については否定的な意味づけをせざるを得ないものの、それが決して特殊なものではなく、他の人とも共有できることであったという点で、彼の状態は大きく変わったようである。

彼のこの変化は、悩みを共有し合えるコミュニティがいかに重要な役割を果たすのかを示唆する。サークルやクラブなどに入るのは、活動をするためということもあるだろうが、そこに属する事で大学生活が充実したものになるのは、おそらく、悩みや愚痴など、自らの否定的部分を共有し合えるコミュニティがそこに存在するからであろう。その意味では、この授業において、彼が自らの問題をディスカッションのテーマにあげ、それを共有してくれる他者と議論が出来たというシステムは、そのような大学のサークルやクラブの果たす心的サポートの部分ピックアップしたものであったのかもしれない。誰においてもそのようにうまく機能するというわけではなく、また領域限定的なものではあるが、この例は、かなり能率的に彼の求めるコミュニティが感じられた瞬間だったのではないかとと思われる。

そして、その後、彼の視点は自分自身に対する否定から、大学への不満へと移行し、大学の制度の問題に直面する。5/21のディスカッション後、彼は、「時間のなさや授業への不満が、たぶん制度（出席をとる授業、成績によるコース分け、自分の学科から抜け出すのに大きなハンデを負う）によるところが大きいこと」に気づいたと書いており、そして、その気づきは彼にとって次のような意味があったと報告している。

自分を確信していくことで、問題点を解決する（または見直していく）という趣旨の授業だと認識しているが、問題の原因が制度によるところであれば、どうしたらいいのか、と考えるようになったこと。また、その制度を変えさせるだけの意欲をもつべきなのかどうかと感じた事。

ここからは、これだというものがない、時間がない、といった形で漠然と感じられていた現状に対する不安や焦りが、「大学の制度」という問題に集約され、取り組むべき課題が明確に見えてきたことがうかがえる。ただし、他の学生もそうであるが、この「大学の制度」という問題に直面しても、その解決はあまりに大きな作業となってしまう。派手な学生運動などはもう流行らない現代において、彼らは大学の制度の問題と、

もう少しうまく折り合いをつけていこうとする。彼の場合は、制度の問題に行き着いたものの、そこからの切替も早く、「その中で自分はどのようにしていくのか」という方向へ問題をシフトしていく。すでに次の回（5/28）においては、自分なりのビジョンをディスカッションの議題にのせていた。

ディスカッションの内容：自分の中でこれからどうしようか、という予定（希望）を考えた。今回はそれについて、他のメンバーがどう反応するのかを見た。

得られた気づき：制度上の問題、という動かしがたい問題から、自分の中で買えていける内容に集積できた。今までは、「自分はこういう疑問がある」という形だったが、「こうしたいけどどう思う？」という形に変わった。

ここに至るまでの経緯を、彼は授業後のインタビューで以下のように説明してくれた。

日常使う時間を分類するだけでなく、具体的にどうしたらいいか、学外、学内、サークルといかつていう時間と言うより、もっと分類してみて。で、サークルどうしようっていうの考えてて、やっぱりサークルでかかったのかな。で、サークルやめるぞって自分に言い聞かせて、そこからどうしようかって考え始めた。（サークルしないぞと決めた事）つらかったですね。

学外の日頃の時間を勉強に費やせるようにしようという風に考えました。だから微妙にここら辺からやってるんじゃないかな。

そして、同じ日の中間作業計画書で彼は次のように書いていた。

作業の目的：あれこれ考えることも大事かもしれないが、まず行動に移す、安易に遊んでしまわないようにする意志。

作業の方法：とりあえずいろいろと勉強してみる、色んな本を読んでみるーだらけないためにその日やったことを書く。

彼にとっての中間作業は、これまでの議論をふまえての実践であった。ディスカッションで得た自らの答えを実践することによってその答えの正しさを検証していくといった形で中間作業がなされたのである。そしてそれを行う事は、他の学生がサークルに費やす時間を自分は自分なりに有効に使うという自負も得られることでもあった。ここで彼の言う「安易に遊んでしまわないにする意志」とは、「サークル入らない」という意志であったという。

サークルやめよう。サークルは遊びなんだから、後から大学生活振り返ってよかったと思えばいいかなと。じゃあ、勉強で行こうと。

この時点で、彼は「あれこれ考えるよりも行動である」という自らの結論にたどり着き、その時点でこの授業の果たす役割は終わったと言う。この結論に至る、言い換えれば迷いをふっきるまでの過程を、この授業はサポートしたのである。しかしながら、その後、彼が実践をしていく上でも、この授業で得たコミュニティは大きな意味をもってくる。中間作業以降、そして授業の終了した現在でも、彼は授業参加者たちによる自主ゼミやサークルに属し、自分なりの学びを他者と共有しながら続けている。このことは、彼にとっては予期せぬ副産物であっただろう。

授業としては終わったけど、自分の中の（学びの探求とか、日頃のそういう）問題としてはまだ終わってないというか、終わる問題じゃないというか。

あとはおまけで、自主ゼミやってサークルやってって、おいしいところがあったから、やったーみたいな。

（サークル入って）面白い。サークルって言うか、人付き合いが足りなかった。そういうのを知らない世界に生きてい

たので、変わった人間だなーと。サークルっていうのを知らなかった、よくわからなかったんで、とりあえず楽しいもんなのかな、と。あこがれがあった。僕は今、入っているのは面白いです。(気づいたらサークルもしてて)楽しい。

Hは、発表時において、自らの状況およびその変化について、以下のようにまとめている。

0. 授業を受ける前：何となく、勉強の意義がわからない、どうしたらいいのか、混沌としていた。

1. いろいろな人の話を聞いて：鎌田先生の話聞いて、出会いを得るにはどうしたらいいのか?と思うようになった。院生などの話で、いろいろなことを経験するのが大切だと分かった。人付き合いの少ない自分にとって痛いところをつかれた気がした。ただサークルに入る時間がなくなるのでは、という不安を抱いていて、ジレンマになっていた。

2. 時間：週3回のバイト、週16コマの出席、通学時間片道1時間(でも家事つき)。とにかく人と比べて時間がない。時間のなさに不満がたまっていた。学校の授業、自分の勉強、サークル、遊び、時間の配分をどうしたらいいのか考えた。でも、考えても進まないことにストレスを感じるようになった。

3. 前向きに：授業制度など、文句を言ったって物事は進まない。じゃあ今の拘束条件のもとで何かをやらないといけないのではないか、と思うようになった。そこで去年の自分を思い返してみると、時間が今よりたっぷりあつにもかかわらず、なにをするでもなく一年を過ごしていた、という感覚が大半を占めていた。時間があるのに何もしていない。ここから行動力とかやる気の欠如の方が問題であって、今まで問題にしていた、時間がないというのは重要なファクターではないと思うようになった。中間期は実際に行動してみることを主題にしてみた。

4. 今まで、そしてこれから：時間はつくろうと思えばつくれるものだとし分かった。時間がないからできない、というのは言い訳にすぎない。やはり、楽なほうにながれがちな人間である自分が問題であった。勉強会を立ち上げようとしたのはこのことが理由のひとつである。そして、自分は今まで閉鎖的であったので、少し足をのばしてみようと思うようになった。人と接することで何かを得られると感るようになった。たとえば、自分にたりないものを知る。

(3) Oの事例(京都大学医学部1回生)

「僕としては、とりあえず自分が進もうと考えている専門の医学に早く触れ、医学とはどういうものか触れたいと思っている(5月7日のリフレクション・シートより)」という言葉が象徴するように、彼は、早く専門の授業を受けたくて仕方がないといった状況にいた。入学前に、医学の基礎研究を人生の仕事としようと決意して医学部に入った学生であった。そして、大学において自分が面白いと思える勉強をしたり、また、皆が勧めるように、大学生という人生にとってとても大事な時期に自分の糧となるすばらしい人々との出会いを得たいと望んでいた。彼は、初回アンケートにおいて、本授業に対する期待については、「これからの大学生活が有意義なものになる、その糧とまではいかなくても、意味ある判断材料にしたい。」と述べており、本授業に惹かれた理由としては、「勉強は一人でもできるし、大学ってなんだろう?(ありがちですが_)」とふと思ったから。」と素直にその内面を表現している。また、本授業で「自分の意見をしっかり持て、言えるような人」に成長したいと述べており、ここに、当時の彼が自分自身に求めていたものをかいま見ることができる。最終原稿では、当時の彼の状況が生き生きと報告された。

自分は大学に入って何がしたいのであろうか?入学してもうすでに4ヶ月が過ぎた今、再び考えてみる。

受験する前に医者という職業について自分で真剣に考えて、そして医学部志望を決断した。基礎研究がしたい、自分の中では、その決心は揺るぎないものだと思っていた。そして入学した時は他のほとんどの新入生と同じように、これから講義にたくさん出て一生懸命勉強するのだ、と決めていた。

そういうわけでこの「大学における学びの探求」という講義も内容が面白そうな講義だと思い履修することにした。なにせ、大学でこれから学んでいくのに、学びそのものについて考察していくのだ。しかも「探求」という言葉は、なんてアカデミックな響きであらうか(!!)。

事実、最初のガイダンスで紹介された座談会の資料に載っている人達の大学生活のエネルギーに圧倒された。テレビな

どで聞いたことはあるけど、実際にいるのか、こういう人達は。周りにいる大学生とは違うな、と。そして、自分も進む方向(彼らはむしろキャンパス外の活動に重点を置いていたが)は違うけれども、このように積極的に大学生活をすごして行きたいと考えた。

しかしながら、医学部は1回生では専門科目の授業はない。加えて、全学共通科目は期待していたほどは面白くない。大学での過ごし方もまだ軌道に乗らぬ1回生の時期であるから、それは悶々とした不全感となって彼に迫ってくる。

しかし、時間がだんだん経っていくにつれて、講義を真面目に出るという僕の熱意は冷えていった。

今やっている全学共通科目の講義が面白くない。(無論のことこの講義は非常にためになりまた、興味もそそられたが。)

このように考えるようになり、全学共通科目の講義にもあまり出なくなるようになっていた。

彼はテーマとして「一般教養は必要か」という問題を掲げ、検討を進めた。以下にその推移をたどってみる。

授業の最初の部分では、座談会資料、鎌田先生の話、上回生3名の話と、3回続けて「他者」のあり方を見せられるわけであるが、彼らの姿は、Oには非常にまぶしく映っていたようである。同時に、それと比較する形で、自分自身の姿も明確に自覚されているのが分かる。

< 4月16日：座談会の報告を読んで >

- ・みんなかっこいいと思う。自分の意見も持っているし、やりたいことも見つけている。それは、学外の活動だからとかではなくて、別に勉強とかでもいい。「自分はこれ!!」と自身を持って言えるものがあることがすごい。僕にはそんなもの全然ないから、特に。
- ・けど、だからといって、そう簡単には見つからないと思う。もっと色々な世界を見た方がいいだろうし、そのためには勇気も必要だろう。この授業を通して、そんな勇気を持てるように、そして、自分が本当にやりたいことを見つけられたら、と考えている。

< 4月23日：鎌田先生の話 >

- ・先生の話で僕が強く印象に残ったのは「興味」という言葉でした。(略) 興味があれば、言い換えれば、好きであればどんどんしなさいとのこと。同感だと思います。その学問が本当に好きであれば、文字通り寝食忘れて一生懸命打ち込めるのではないのでしょうか。胸をはってやれるのではないのでしょうか。「しかし、好きなものを見つけるにはどうすればいいのか。」これが僕の立てた問いです。

< 4月30日：上回生3人の話 >

- ・「出会い」は大切と皆口をそろえて離していたし、実際僕もそう思う。けれど「どうやって出会うのか」が課題である。
- ・「アンテナをたてておく」という言葉がヒントになると思う。つまり、ささいなことでもただ見過ごすのではなく、自分の方にたぐり寄せるということが大事なのではないか？

この過程の中で、自分なりに問いを立て、思考もされていることが伺える。自分がやりたいことは？自分は大学で何をするのか？そのような問いが、それらを得ることのできている他者の姿を目の当たりにすることによって、より差し迫ったものとして彼につきつけられている。それは3回続けて吐露されているものであった。を見つけるにはどうしたらいいのか、出会いが大事だと言うけれど、どうやって出会ったらいいのか。彼が3回の授業を通じて、その問いに対する答えののっかかりとして見つけたのは「アンテナをたてる」ということで

あった。そして、次の回からはじまるディスカッションにおいては、大学の授業、特に全学共通科目へとテーマが定められていく。しかしながら、5月7日のディスカッションでは「自分の中であまり考えが整理されていない状態で話を聞いていたから、その話を呑み込んで理解するまでに時間がかかってしまった」、14日のディスカッションでも「そもそも学びとは何なのでしょう。（略）結局の所、「学ぶ」という意味を個々で見つけ、その対象も見つけ、そして実行するという一連の過程が「学ぶ」ということなのかもしれないと考えました。そして専門のことだけではなく、もっと広い世界観をもつということも重要なのだとも感じました」としながらも、「まだまとまりを見出せず、課題の設定も困難な状態」とあり、まだ問題を明確に対象化できていない様子が見える。

1回生の前期は、大学という新たな環境との出会いの時期である。自分が受けなければならない授業の時間、質、そして縛りの程度など、システムすべてが高校までとは違ったものである。「大学の授業」をつまらないと思っても、比較基準や参照点が見えないままでは、何がどのようにつまらないのかを理解するのは難しい。加えて、授業に出席するという活動を支えてくれる生活基盤も、新たに作られる時期でもある。それまでとは違う、大学での新たな人間関係を作っていかなければならないし、また、その人間関係をとりまく大学生としての社会や文化になじんでいくことも必要である。加えて、自宅から通えない学生は一人暮らしをしなければならず、生活の基盤となる家庭生活も、それまでとは大きく異なったものとなる。大学の授業も、あくまでも大学生である彼らの生活の中で位置づいていくものであるから、ごく私的な生活での感情の揺らぎによって、大学の授業や大学生活全体への不毛感が生じて不思議ではない（水間、2003）。時にはその大学に関する否定的感情が自分自身へとフィードバックされて、ますます否定的な感情の循環にはまってしまうこともある。学生Oの場合も、「どうやったら好きなものを見つけられるのか」、「どうやったら出会えるのか」という問いが繰り返され、当時の彼が、決して安穩とした状態にはなかったことがうかがえる。

しかしながら、彼の場合、自分は医学の基礎研究がやりたい、そのために大学に入ったのだ、という自覚が明確にあった。それを抛り所にしながら現状を見たことで、彼は、自分の問題を少しずつ明確な形にしていっていった。発表時の原稿において、彼は自らのテーマの変遷を、以下のように振り返った。

この講義の最初の関心は「出会い」だった。（略）しかし、どうも偶然性に左右されている感じがして、自分にもそんな出会いは起こりうるのかと不安に感じていた。（略）（「アンテナをたてる」＝「何事をするにも興味をもつ」という）言葉にヒントを得た僕は、現在興味を持っていること、つまり医学部の専門科目に早く触れてみようという結論に至った。ところが、医学部は1回生のうちは全く専門がない。又、入学する前に期待していたより教養科目がつまらないという現実と直面していたのもその時期であった。そういうわけで、「全学共通科目」に関心が移り、テーマとして取り組もうと決意したのである。

5月21日のディスカッションでは、彼の問題として、「大学で一般教養は必要かどうか」ということが掲げられた。「もしも広い教養を見につけさせるとのことなら、週1回、1.5時間の講義で学ぶものは狭いのではないか。むしろ自分で本を読んで学ぶべきなのではないか」と主張している。それに対してディスカッションの相手（経済学部2回生）から、「それでは好き嫌いが出てくる、そして偏った人間になる、だからある程度強制されて学んだ方がよい」と反論されたという。それでも「その教養を学んでいなかったことで不利益を受けて初めて、学ぶ意志が生じてくるからよい」と思ったというが、ディスカッション後に振り返ってみて、「不利益をこうむるのは他人なのかもしれない」、「だから、早い段階で教養を身につけるのが必要で、それは大学のときにやることだというのが、大学側の考えなのだろう」とさらに思考が進んだと報告している。

5月28日においても、彼は同じく「一般教養の必要性」の問題意識を相手（薬学部2回生2名）にぶつけている。相手2名はいずれも「専門科目がつまらない」と述べており、一人は「どうにか大学側にアプローチをかけて改善していきたい」、一人は「大学は完全に無視」というスタンスをもつ者たちであった。まず、専門科目がつまらないということ自体が、専門を早く学びたいと思っているOにとっては衝撃だったらしく、2人に対するコメントには「専門はそんなにつまらないのですか」という文章が書かれていた。だが同時に、彼ら

2名は、つまらない授業に対する自分のスタンスというものをもっている者たちでもあった。それゆえ、彼らは全学共通科目をつまらないと言いながらも、何となく流されてそのまま受講している学生Oのあり方に対しては、「今の無駄だと感じている時間を、大学に文句言うなりまるっきり無視したりしたら」と指摘したようである。彼は、この日の気づきの欄には「一般教養を無駄だと思うなら、今の時間を無駄に過ごしていることになる」ということ、そしてその気づきの意味については、「一般教養を適当に流しているのは一番中途半端だなということ」と書いていた。これは、対象化されていた問題意識が、再び、自分のものとして位置づけ直される端緒といえよう。その後、「一般教養は必要か」というテーマのもと、中間作業が進められ、彼のレポートでは、一般教養の面白くなさの現状とそれに対する分析、そして面白くするにはどうすればよいのか、ということが主張点となるのであるが、それでも第三者的な視点のみで終始してはいない。それは、「自分の好きなものをどうやって見つけたらよいのか」と、彼が当初から自分の欠けている点への自覚ができていたということもさることながら、この回における自分の問題への還元過程があったからではないだろうか。

最終レポートによると、彼が学生側にとったアンケート（医学部1回生24人、総合人間学部1回生30人）では、現在の全学共通科目に満足していない者は実に83%にのぼり、その理由として挙げられたのは、教科の選択など制度に関わるものと同時に、教科書、レジュメの音読だけ、あるいは、ただひたすら教官が黒板に書き続けそれを学生が板書するといったような、学生がやる気を起こすことの難しい講義内容についてのものが多かったという。問題の原因としては教官側の態度や大学の制度といったことがあげられ、そしてそれらについての要望は多数提出されたこと、だが一方で、学生の側が、自ら改善している点についての回答は少なく、わずかに得られた個人としての解決策は、「講義に出ない」や「自分で勉強する」といったものであったという。彼は、「そこで、僕は自分自身でできる全学共通科目に対する改善策を考えてみた」と述べ、以下のように続けた。

まず、そもそもの「学び」のあり方について考えてみた。「学び」とは自分を高めるためのプロセスになりうるとは、2-1で述べたことだ。そして、その目標のためには他人から強制されても意味がない。強制されて行っても、いい加減になってしまうからである。だからむしろ、「学び」は自発的、主体的なものでなければならないと考えられる。

ならば、講義に対しても主体的になる必要がある。このように考えるようになった。想い返せば履修登録の時から反省すべきことがある。僕は履修科目の選択基準を単位取得の難易度に置いたであった。サークルの先輩と単位のとりやすい講義と一緒に選び、そしてそれを基にしてそのまま登録したのである。単位のとりやすい講義には、人が集まってくり、必然的に大教室での大講義になる。そしてそのような講義は面白い講義が少ない。つまり、講義が面白くないとぼやいていた原因は、面白い講義を探すことを怠った自分にあるのである。

主体的に全学共通科目を利用するためには、まず自分が興味の惹かれるような科目、そして必要であると考え科目をきちんと探すことから始めなければならない。まず僕は後期、この段階をきちんとやっていこうと思う。

最後の部分については、発表時の原稿において具体的に以下のように書いていた。

単位の面では後期は全学共通科目にはあまり出なくてもよい予定なので、少々つらくとも本当に興味のある講義だけを受講したい。（略）単位どうこうよりも、興味、そして中身のある講義を探してみたい。また、最終的には僕自身のやる気にも左右されてしまうのであろう。どんなに面白い講義をされていても、僕自身にやる気がなければ、僕の目にはつまらないとしか映らないからである。

学生Oの事例は、あまりにもきれいであるため、多少の揶揄をはさみたくもなる。しかしながら、新しい環境に身を置き、「自分は何がやりたいのか」と模索していた1回生だからこそ、ひとまずはこのような流れで自分なりの結論にたどりついたのではないかと思う。その意味では、1回生のこの時期に、たとえそれが一時的なものであったとしても、一旦そのような結論を得た、ということは大事なことでないだろうか。もしも再び、同じ問題にぶつかったとしても、それを受け止める彼は4月当初の彼ではない。大学の授業に対する意

味づけを多少なりともつかんだ彼である。その意味づけが再構成されるにしても、無から始まるわけではない。彼自身、最終レポートで以下のように書いている。

半期という短い間の講義であったが、この科目を選択して、そしてこのように一般教養、学びについて考えたことは本当に意味があった。ただ何となく講義を適当に出て、テストのときだけ少し必死になって単位だけをもらおうというような、そんな大学生活を送るのではなく、このテーマで考えたことを忘れずにしなければならない。また、みな非常にやる気にあふれた人々であり、その中で自分のモチベーションも否応なく高められた。

1 回生にとっての切実な問題を、しかも具体的な問題として設定しにくい不全感を形にして問うことができた点、また、それをぶつけていける相手と出会えたという点だけでも、十分意味のあることなのではないだろうか。

(4) E の事例（京都大学経済学部 4 回生）

E は、経済学部の 4 回生である。4 回生でこのような授業に出るのは非常にまれであるといえる。4 回生といえば、就職活動や就職試験、あるいは大学院入試などの勉強、また、卒業論文作成などに追われる時期である。そのような時期に、なぜこの授業を受けたのか。

彼は、初回アンケートにおいて、本授業に対する期待の欄に「大学 4 年間、かなりアバウトに過ごしてしまった。学ぶあるいは体験すること、を深く追求していなかった。この授業を通して、少しでも、過去の埋め合わせをしたい。」と書いていた。当時の状況について、最終レポートで以下のように説明していた。

シラバスをみたのは 4 月であった。その時期は、経済学部ではぼちぼち内定がでて就職活動を終えようとするものが現れだす時期でもある。そのころ僕は何をしていたのか。つむじ曲がりなことも手伝って、僕は就職活動というものを全くしていなかった。また、しようとする気もなかった。（略）しばらく不安と対峙していたが、結局は大学院へ進宇しようと決断した。（略）大学院とは何をするとところであろうか。それはきっと、勉強をしながらも、徐々に研究ができるようにトレーニングするところではなかろうか、そう思った。同時に、また勉強か、とも思った。（略）今までの自分を振り返ってみる。すると、曖昧ながら「良い勉強」「悪い勉強」に分けられそうだと気がついた。（略）「悪い勉強」には高校 1 年生以来どっぷりつかっていたのであるが、実を言うと、大学時代での勉強も、これがまさしく楽しい、といった経験はほとんどなく、つまりは今の今まで「悪い勉強」にはまっていたため、「良い勉強」をしていたとき、僕はどのような気分で、どのように日々を過ごしていたのか、さっぱり思い出せなくなってしまっていた。（略）このような経緯があり、勉強という言葉に対して、僕は特別な関心を持つようになった。（略）そんな折に、つらつとシラバスをめくっていたら、「学びの探求」という題目に目がいった。そして、そのまま受講へといったのである。わけのわからない難題と睨めっこをしていたがゆえのきっかけであり、期待は、もちろん、いずれ決着をつけないといけない難題へのヒントをつかむことである。

彼にとっては、この授業で「学び」について考えていくことは、単に「大学で何を学ぶか」とか「大学生活をいかに豊かなものにするのか」という枠を超えたものであることが分かる。彼にとってその問題は、彼にリアルタイムで迫る人生の問題に直結してくるものであった。しかも、大学生としての時間もそろそろ終わりに近づいており、振り返るべき大学時代の日々の方が多くなっている。彼にとって本授業は、そのような文脈の中に位置づいていたのである。また、彼は、インタビューで「僕はあまり就職したくないので、就職して会社で働くことから逃げるために大学に残ろうかなと思って。残るには勉強についてもういっぺんちゃんと考え直さないとあかんという感じがして、この授業の名前に惹かれて受講したというのがあります。」と答えていることからわかるように、大学院進学という進路決定は、彼自身にとっては一応の結論として出したものの、決して積極的な意味を持たない「逃げ」的なものとしてとらえられていたようであった。ある回のディスカッション後、彼は相手に対して、「就職に関しては、僕も不安があります。というか、僕は失敗組ですが、

3 回生ぐらいにじっくり考えておくといいかもかもしれません。」と書いていた。彼の根底にある自尊心の低さが生々しく伝わってくる。

実際、人生の問題やそれに関わる否定的な感情と、彼に残された大学生としての時間の少なさという要素は、彼の発言や記述の端々において見受けられた。さらに、すでに数年間大学生活を過ごした経験から、自分が大学においてやれることとやれないこととの分別がある程度できあがってしまっており、たとえば上記の問題に対しても、可能性に満ちあふれ、また、大学生としての自分の限界も未知数の 1 回生と同じようには向き合えないようであった。たとえば、4 月 16 日、座談会資料を読んだ後の感想には、「資料に出た人たちは、力を入れるベクトルの方向が自分とは異なると感じた」と書いており、学びを模索する際の、4 回生ならではの難しさを示唆している。

そのような内外からの圧力の中で、彼は、先にあげたように「勉強」という大きなテーマを掲げ、その視点から大学の学びについての問題にアプローチしていくわけであるが、そのテーマは、4 回生の彼にとっても、いやむしろ、4 回生の彼であるからこそ、切実で、彼自身の問題の核に近いところに位置づいていた。最終的には、この授業自体を分析していく、という手法をとるのであるが、それまでの過程を以下にたどってみよう。

< 4 月 23 日：鎌田先生の話 >

- ・ 4 年間放っておいてもやりたいことは出てくると鎌田さんはおっしゃっていたが、ふと自分を省みれば、全く持って駄目である。見つからなかったものを、残りわずかな時間で見つけようとあがき、最近自分なりにはかなりのコマ数の授業に出ている。けれども、そんなことをしてもアカンという気持ちもある。まわりは就職活動に精を出し、少しずつ結果を出している友人を横目に、かなりあせってはいる。
- ・ 社会と逆行していたとしても己を貫いていたい、と思いつつ 22 年も過ぎてしまった。年を喰えば悟れるのかもしれない、が、むしろ、①社会的制約（自分でかつてに思いこんでいるにすぎないかもしれないが）があって、②しかも興味のないものは無視、なんてことはできないという閉塞した状況の中で、なんとかやりくりしていく方法はないか、ということを中心にして、この授業を続けたい。

また、最終レポートではこの回について、以下のような振り返り補足が見受けられた。

見つからなかったものを、残されたわずかな時間でなんとか見つけようとあがき、最近、自分なりに、いろんな授業を見学して回っている、けれども、そんなことをしても駄目なのではないか、という不安もある。就職活動に精を出し、少しずつ結果を出し始めている友人を横目に、かなりあせっている。

世の中の規範により、強引に、人生図を設計しなければならない、というような圧力がかかってくる人間にとっては、それが得られるという確かな根拠もないのに、そのうち待っていればなんとかなると言われても、そのアドバイスには極めて不安を感じてしまうのである。

鎌田先生の話は、大学ではじめて学ぶ 1 回生を特に念頭においたものであったから、4 回生の彼にとっては自分のおかれている立場の切実さも加わり、共感しにくいものだったことであろう。大学生活 4 年目を迎え、「自分は何も得ていない、見つけていない」という現実がそこにあり、実際そのことに苦しんでいるという状況にあるため、なおさらその感は強かったであろうと思われる。次の回での感想で、その思いは明確に吐露される。

< 4 月 30 日：上回生 3 人の話 >

3 人とも「羨ましい」の一言に尽きる。何が羨ましいかといえば、非常にいいタイミングで毎日を白熱するものに出会ったということである。自分のことを考えてみると、4 年間に於いて、それが自分を覆してしまうような出会いはなかった。（略）なぜだろうか。なぜ出会いがなかったのか。この疑問を解決する、解決までとはいかなくても、今後の役に立

つ指針をうちたてることがこの授業のメインテーマだと思うし、4年間解決の糸口すらみつからなかった問題で、即答は全くできない。

その後はディスカッションに入っていくが、5月7日は「3人で話をしているだけで手一杯であり、議論と呼べるものではできなかった」、5月14日は得られた気づきがあったとはいうものの、それは「グループディスカッションの具体的なテクニックがわかった」ということであり、あまり彼自身の問題意識を深めるようなディスカッションが進んだわけではなさそうであった。5月21日も「3人とも、学びに対する具体的なテーマがなかなか捻出できず困っていると把握できた。いつも感じてはいるが、今回は言葉で認識した」ということで終わってしまっている。ただし、ディスカッションの相手に「世間体を気にしすぎているのではないか」と言われたことで「脳に冷たいものが走るような感触がした」という。最終レポートではこの点について、「他者から見て自分はどんなのだろうという論点に気がついた」と報告している。

5月28日は、「勉強しなくてはいけないというドグマにまつわる悩み」についてディスカッションを行ったというが、この回は、同じ学部の3人が集まったこと、しかもその中に進路がしっかり決めている者がいたこと、また、中間作業に入る直前の回であったことなど、色々な要素が入り交じってか、この回のリフレクション・シートには、以下のようなまとめ直しが見受けられた。

僕は、高校、大学受験において、勉強をしなければならないというドグマにひきずり込まれてしまった。勉強に未練がある、が、一方では勉強を必ずしも好きではない、という矛盾した感触がある。社会に出るということは、勉強を止める方向にシフト・チェンジするという意味を持つと思うが、そういった社会的通念とのあつれきに悩んでいる。

また、最終レポートにおいて、この回に関して、この授業に対する彼の様々な思いが報告されていた。

四六時中勉強をしなければならないというドグマに陥っている僕は、極めて「自由の感受性」「心が晴れ晴れする感受性」の欠乏した人間であるということになる。自嘲的ではあるが、心の底ではこの欠点を自覚している。

I君は将来の進路がほぼ確定しているので、同世代で目標を持つものへの恥ずかしさを感じた。当初より感じていたのであるが、勉強にほとんど重きをおかない大学生活をおくってきたので、常々、「まなたん」のみんなと同じ部屋にいることに恥かしさを感じていた。

もしも彼が4回生でなかったら、恥ずかしさも感じることはなかったであろう。しかしながら、4回生であれば誰しもが恥ずかしさを感じたかという点も疑問である。先に他の学生に指摘されたように、確かに彼は「他者から見て自分はどんなだろう」ということを気にしているようにも思われる。5月21日の次回に向けての課題については、「卒業してゆくにもかかわらず、いまだに勉強への未練を捨て去ることができずに悩んでしまう姿を、他の人の目にどのように映るのか聞いていきたい」とそのことがダイレクトに書いていたし、また、「4回生というのがある居心地の悪さは多少あった。その分、あんまり変なこと言ったらあかんなとかいうのがあった」こと、「勉強に対する僕の中でコンプレックスがあるので、そのコンプレックスをあらわにして、それをみんなにコピーして配られるというのは」抵抗があったことをインタビューにおいて明かしていた。4回生であることに加え、そのような彼であるからこそ、様々なことを感じ取ってしまうのであろう。

この性質は、彼をさらに苦しめるものとなり、授業を進める上でも多少の弊害となっていたようである。たとえば先にみたように中間作業計画書を提出することも、また、その中間作業を進めることも、かなり大変な作業だったようである。中間作業自体も、「自分から主体的に勉強している知人や学問を生業としている大学教官へのインタビューを行い、そこから、今の自分の良い面、好ましくない面を考えていく、勉強せねばならないというドグマから脱出する一助とする、ということを目的としたものであった。その点についてインタビューで以下のように報告した。

いろいろな友達にインタビューを1時間ほどさせてくれへんかと言うことが、ものすごい僕の中で恥ずかしくて、ぎりぎり中間が終わるくらいまでインタビューにいけなかった、ということもサボったところではあると思います。あと、インタビューの解析をすると書いてあるんですけど、実をいうと、きちんと解析はしていなくて、自分がしゃべっていることを聞くのがいやっていうか、自分の声を聞くのがいやというのではなくて、多分しゃべってる内容で、僕がコンプレックスに思っていることをしゃべっていると思うんで、それを改めて自分の耳で聞くというのは恥ずかしい気持ちがありました。

しかしながら、そのような彼であるからこそ、この授業を意味あるものとすることができたともいえる。たとえば、出席を続けた理由として、やはり他者との関係をあげる。

95%くらいは、多分、15人弱くらいでやってたんですよね、この授業。抜け出されへん、途中でやめるわけにはいかんという雰囲気があって、出席せざるを得んというか、人間関係的な面で。それがあったんで、一応必ず出席して。少人数のゼミみたいな感じなんで、人間関係の吸引力で来ざるを得ないというのと、あと、毎回ディスカッションしたときに、こういうシールみたいなのがあったじゃないですか(リフレクションシートでのポストイット:ディスカッション相手からのメッセージ)、これを見るのが楽しくてというのがあります。先週言ったことに対してどういう風に感じてののかな、という。これはすごい良かったです

ところで、彼は、最終レポートにはこの授業の振り返りは十分すぎるほど書いていたのであるが、他の学生のように、中間作業とその結果の報告はほとんど書いていなかった。彼の発表および最終レポートは、この授業の振り返りを中心とした、その時その場での自分の苦痛についてであった。一体、彼は中間作業で、またこの授業で何を学んだのだろうか。最終レポートで、中間作業で行ったインタビューについては、以下のように釈明されてあった。

このレポートにはインタビューの結果がほとんど反映されていない、と思われる向きがあろう。そのとおりである。が、そのことはインタビューが無駄になったということの意味するものではない。伺った様々な話は、数回聞きなおすことによって強く脳に浸透しており、先々においてきっと役に立つと信じている。それに、他の人が勉強に対してどのような考えをもっているのだろう、ということはずっと以前から気になっていたことであり、話を聞いてきて非常に面白かった。インタビュー時の状況は、仕様もない質問ばかりをぶつけているという恥かしさもあいまって、今をもってなお、臨場感をともなって自由に想起することができる。また、なによりも、テープとして残っているということが嬉しい。一寸悪趣味な宝物となった。

そして、授業の意味については、何よりも「出会い」をあげる。

(この授業に参加している人たちは)全然僕の友達関係と違う人ばかりなんで、その辺はすごく珍しくて。M君と会ってすごいなぁと思ったのはあります。僕の普段付き合っている友達は、(略)勉強とは縁のない人ばかりですね。僕の場合は、半年ごとにテーマをおいて4年間勉強してきたんですけど、例えば物理の実験をやっているという話を僕の友達に言っても、君の言ってることは理解できないとかそういうこと言われて。でも、ここでそれを言うとかある程度受け入れられるという感じで。勉強に対してポジティブな集団だなあという点では大分違いがありました。ただ、僕の友達関係はそういう人が多いんで、大学での勉強について何やかんや語るときに僕が何か意見を出しても、それは違うみたいな感じで言われて、意見が食い違うことが多かったとも思います。大学の名前とか企業の名前とかブランドを自分に貼り付けるための勉強はするけど、入ってしまった以上は何も努力はしないという人が多かったんで、勉強に対する見方が全く違ったと思います。

(テーマ設定において)M君とW君に会った影響は強いです。よく勉強してる奴があるねんなあというのがM君の印象なんですけど。(略)優等生的に学校に来て勉強するんじゃないで、全く疑問を持たずに勉強してはるから、その点に関して

僕よりもワンステップ進んでいる・・・というのは正しいかどうか分かりませんが、・・・じゃないかなと思いました。(この授業の意味は)真面目に勉強してはる人との出会いというのが大きいです。このゼミで何人かは優等生的というか、中学校、高校でほめられるようなタイプの勉強をしているというか、そういうふうな思考回路になってるんだという人もいたんですけど、その優等生的な人以外はだいたいみんなポジティブな感じで勉強してて、その中でも抜きん出る二人がM君とW君だったなという感じで、勉強に対してポジティブな態度をとっている人達と会ったということは意味があったと思います。この4年間のほかの授業なり何なりの活動ではなかったものが得られたと思います。

同じくらいの年齢でこれだけ知ってる奴があるんやなという。多分、京大に来て一番すごいというか、勉強の分野に関してはすごい人と会えたと思うんで。今までの僕の友達の中では、経済以外の勉強に四方八方に手を出してるのは僕だけだったんですけど、この授業に来て、まだいるんだと思って。僕は広く浅くだったんですけど、広く深く知っているという。だからすごいな、と。多分、これから勉強なり何なりしていくのに、いろいろつまみ食いしながらやっていくのは変わらないと思うんですけど、つまみ食いの程度についてはかなり影響を与えてくれるんじゃないかなと思います

彼のリフレクション・シートを見る限り、具体的にディスカッションなどのやりとりがうまくいったような雰囲気はあまり見受けられない。だが、授業の最初の段階で、4回生だというのに、これまで出会いもなく好きなものも見つけられなかったことに焦りを感じ、わずかな時間でもがいていた彼にとっては、この時期にここまで思える人と出会えたということは大きな意味をもつであろう。他者の存在だけで彼は色々と思考を深めることができた面があったのである。もちろん、もう少し早く出会っていれば、という気持ちがあるかもしれないが、4回生という外的条件、これまでの大学生活があったからこそ、出会いの意味も、より一層感慨深いものとなったと思われる。

そして、「四年間大学に在籍していて、様々なレポートを書いてきたが、「思索の過程を述べる」ことまで要求するものには初めて出会った。かなり面食らった感がある」という授業に対する感慨も、4回生の彼ならではのものであつたらう。

第3節 考察

以上、それぞれ学部や学年、おかれた環境や問題意識の異なる4人の学生についてみてきた。彼らは、“学び支援プロジェクト-学び探求編-”で、“大学における学び”をテーマに掲げ、それぞれの視点から問題にアプローチを行い、それぞれ自分なりの結論なり収穫なりを得た。

そもそも、それが問題として彼らに迫ってくる文脈自体異なっていた。たとえば、学生OやEは、大学と大学以外との世界との接点の中での苦しみを呈していた。Oの場合は、それまでとは違う大学という世界との出会いの中で、“これから大学において何をいかに学ぶのか”ということが問題として意識される。それに対してEの場合は、これまで過ごしてきた大学という世界からそろそろ出て行かねばならない時期にさしかかり、“大学を出てどう進んでいくのか”ということが問題として意識される。そのことを考えていく中で、彼の場合は、“これからも学び続けるのか否か”、“学びとは一体何なのか”ということが中核的な位置を占めていた。この点において、学生Eにおける“学び”の問題と他の3名における“学び”の問題とでは、その構造が異なっている。一方、学生MおよびHは2回生である。大学時代に何かをやるにはまだ時間がたつぷりと残されている時期である。加えて、大学生活を1年間過ごしたことで、大学というものが大体自分なりにつかめているため、何を問題にすべきか、具体的な把握も可能である。しかも、2回生になると待ちわびていた専門科目が入ってくる。それに出会うことによって、もう大学の授業で未知の部分はなくなる。1年間の教養課程と、2年目に入って出会った専門課程の授業とで、教官と学生とのやりとりもある程度分かってくる。いうなれば、大学をある程度知ったところで、改めて大学における学びが問題になってくるのである。

実は、この授業はもともと意図していた導入教育としての位置づけを、受講学生の層のためにはずさざるをえなくなったという舞台裏もあるのだが、しかし、これらの知見は、様々な学年がこの授業に参加していたからこそ得られたものであった。

いかなる学年においても“学び”の問題が重要なものとして位置づいていたということは、言い換えれば、どの時期になっても、質や構造こそ変わるものの、大学で何かを学ぼうとする限り、その“学び”ということは問われ続けるものなのだとすることをいうこともできよう。もちろん、それに取り組む大学生自身の意識世界や志向性によって、その問題の構造は実にさまざまである。そのため、同じく“学び”ということを経験したとしても、そこに共通の問題意識や理解があるというわけではない。その意味では、この授業における、学生達自身の文脈からそれぞれの視点で“学び”の問題を設定し、考えていくことができるという構造は、彼らの問題意識に根ざしたところで学びを考えていくという過程には大いに寄与したであろう。一般大学生の学びとか、一般に学ぶとはどういうことか、といった、第三者的な立場を議論の題材としてこの問題を追求していったとしても、彼らの内面世界と密接にリンクしたところでの問題発展を望むことはできなかったであろう。特に、ここであげた4名の学生たちをはじめとする“学び”を自らのテーマとして掲げ、それに対峙した学生達にとっては、“学び”をめぐる問題は、非常に深いところに位置づいていたようであった。

今手元にある資料を見る限りでは、学生達は、大学の現状を嘆き、最初は授業のあり方や単位取得の制度の問題などを批判しながらも、自分たち学生のあり方や、自分自身の時間の過ごし方や勉強のスタイルを見直したり、学びあえる仲間を探したり、自分たちの力で解決あるいは妥協できる方法を模索するようになることが分かる。大学の制度といった大きな問題に挑むには、大学に身を置く4年間という時間はあまりにも短すぎる。ならば、できるだけその4年間で充実させることを最優先していこうという結論に至るのである。

実は、この転換点が、“大学における学び”の問題を打破する分岐点になるのではないかと筆者は考える。大学で学ぼうと思って入学し、その現状に失望するとき、大抵の学生は、大学のそのようなあり方を第三者的に批判するであろう。しかしながら、自分自身もその大学のあり方を構成する一要素となっているということに気づくとき、“大学”を眺める“自分”の視点の位置は大きく変わる。大学の持つ意味も大きく変わり、当然、“大学で学ぶ”ということの意味も劇的に変化する。授業に参加した学生には、このような変容プロセスをたどった学生が数名おり、いずれも、大学の制度の問題に固執せず、とりあえず自分自身でやれることを主体的にやっていこうという決意をもつに至った。

この点は、この授業で彼ら自身が問題を掘り下げていった一つの成果であろうと思われる。第三者的に大学を批判し、不満を感じることは誰でも出来るが、一旦それを口に出し、何に不満をもっているのかを他者に話し始めると、いつしか「不満を持っている自分」の姿も明確な輪郭を得てしまう。そのため、その評論家的に不満を述べるだけではすまない状況に追いやられてしまい、「ではどうするのか」という問題に真剣に取り組まざるをえなくなるのである。さらに、自分と似たような状況で停滞している他の学生を見ることによって、自分の状況を客観的に眺めることができる。時には、このままいっても仕方がないという先事例に出会うこともできる。事例としてはあげなかったが、京都大学薬学部2年生Kは、インタビューにおいて、自分の問題意識の転換点を、以下のように振り返った。

専門の授業がだめだとか、一般教養の科目がダメだとか、そういう話はしてた。でもやっぱり皆結論が出てない。同じような悩みというか、たとえばO君とかも一般教養がつまらないとか、M君とかもそういうような話してたけど、そういう問題を抱えているにもかかわらず、結論が出てこないところから、結局は、僕もある程度先を見越してやってるので、制度の問題ってぶつかったりしているっていうのを見てたけど、そこをどうにか打破できないかを見ていた。(略)学生は3000人とか沢山いるにもかかわらず、大学は1つしかない、じゃあ大学はどうあるべきかと考えた時には、制度とかいう問題になる。でも制度とか理念とかは動かせない。はっきり言って色々考えたけど動かせない。少なくとも僕一人の力では、現時点、短期間の間には動かすものではない。(略)結局のところは自分が大学に対する考え方が間違っていたかなと。大学に関してちょっと考え方がずれてたかな、やっぱり自分が結局最終的に来るのかな、と。(略)やっぱり皆も同じように制度とか考えても同じようにぶつかって、結局のところ、建設的な打開策がでないという状況だった。で、結局進んでいって、中間作業で、ある程度想定してたけど、さらにそこから自分を客観視できた。他の学校の方とか他の人がそういうのを言っているのを聞いて。同じ問題を抱えているにもかかわらず、解決策がないっていうのを聞いて、なんか逆に、他人のを聞いて、自分が変に大学に固執していたかな、と。

自分と同じような壁にぶつかっている他者の姿を見て、自分の行き詰まりを対象化し、視点の転換を図ったプロセスが実に明確な形で言語化されている。問題を共感できるような他者、また、自らと同じようにもがいている、いわば“鏡”としての他者の存在は、自分自身にとっての“大学における学び”の問題など、自らの内面世界の深いところに根ざす問題を考えていく上では不可欠なものでもある。そのような他者とのネットワークを構築することができただけでも、この授業の意味を見出すことはできよう。また、その他者に先輩や後輩が入っていることで、いうなれば、自分の将来や過去のモデルがいるというということで、現在という位置をもとらえ直すことが出来る。これは、この授業の意図していたことではなかったのだが、大きな収穫であった。

今回、その視点の転換を得て、現時点での結論、そして決意を得た学生達ではあるが、その後の学びの過程においては、再び新たな構造をもつ問題に出会い、またうまくいけば、その問題を乗り越える視点転換を再度おこなうであろう。大学における学びの問題は、ある一定の時期までは、彼らの時間の蓄積とともに螺旋的に積み重なっていくのではないかと予想される。そして大きな広がりをもつ人生の問題が切実なものとなってくるとき、学びの問題は新たな次元へと推移するようであるこのような経過をたどっていくことも、大学生の学びを考えていく上では興味深い。

引用文献

橋本 勝「FDと学生力 - 岡山大学学生・教員FD検討会の1年 - 」『京都大学高等教育研究』8, 2002年, 179-187頁.

溝上慎一「大学生の学習意欲」『京都大学高等教育研究』2, 1996年, 184-197頁.

溝上慎一「学生の理解の枠組みをふまえた授業展開—教授技術論を乗り越えるための視点—」京都大学高等教育教授システム開発センター(編)『大学授業研究の構想—過去から未来へ—』東信堂, 2002年, 57-86頁.

溝上慎一・田口真奈「学生主体の授業 KKJ 実践における学生たちの学び」『京都大学高等教育研究』5, 1999年, 57-84頁.

水間玲子「学び支援プロジェクト(大学生活編)における学生の参加動機について」『京都大学高等教育研究』8, 2003年, 75-99頁.